猫車④

(1) 「おのれ怪物かくご」と通りかかった旅の浪人秋月隼人は怪猫にせまっていきました。「ゴロニャーオー」としばらくはニラミあっています。そのころ

(2) あやういところを怪猫に助けられたお千代は、ゴンタの手からのがれて我が家へにげもどってきました。「孝七や、孝七」「姉さんどうしたの」

(3) 「私はもう少しのところで、ゴン太のために人かいに売りとばされるところだったのよ。それでこのウチに居てはこわいから、峠の向こうの伯父さんのところへにげましょう」「うん、その方がいいね」

(4) 姉弟は大いそぎでしたくをします。「さ、これこれとこれをもっていけば大丈夫よ」「姉さんまたアトでとりにくればいいよ」

(5) ふたりは、ゴン太一味がおそってくることをおそれて、その夜のうちに峠の向こうの伯父の家へ向かいました。そのころ、

(6) 秋月隼人と怪猫は、はげしくたたかっていました。「えーい」「ガオー」

(7) 「ガーッ」「うっしまった」刀をくわえられてさすがの秋月もどうすることもできません。そこで左手で小刀をぬいて

(8) 「えーい」「ギャオー」怪猫は二刀流でかかってこられたからびっくりして、空中へとびあがってそのままにげ去ってしまいました。

(9) 「フーム、おそるべきマモノに出会ったものだ。あれは猫が化けたものにちがいない…よし、草の根わけてもさがし出してたいじしてやるぞ」そのころ、

(10) 秋月の刃からのがれてかえってきたタマは、我が家のヤネの上で「ニャオーン、ニャオー」とないていましたが、お千代孝七のすがたはありませんでした。さて…。